

ルウェンゾリ、スタンレー山塊（マルガリータ峰）登頂 —2012年2月—

栗本俊和

京都大学学士山岳会

1. ルウェンゾリの地理

アフリカで氷河のある山は、キリマンジャロ、ケニア山とルウェンゾリの3山のみであり、5000 m以上の山と一致する。ルウェンゾリは、アフリカ中央部のウガンダ共和国とコンゴ民主共和国の

国境に位置し、ルウェンゾリ山地（または山群）とも呼ばれ連山をなしており、山地の長さは約120 km、幅65 kmである。キリマンジャロ、ケニア山とは異なり火山ではなく、アフリカ大地溝帯に属する西リフトバレーの側面が隆起したことに



図1 ルウェンゾリ地図。スタンレー山塊（Mt. Stanley）を含む7つの山塊名が書かれている。カセセ、イバンダ村も読み取れる。

Uganda Maps © Andrew Roberts, 2008 より抜粋。



写真1 スタンレー山塊、右が最高峰のマルゲリータ峰 (5109 m)、左がアレクサンドラ峰 (5091 m)、その左、スタンレー氷河からアレクサンドラ東南稜を下り、右のマルゲリータ氷河を登り詰め、最後にその右の岩稜に取りつき頂上に達するという変化に富んだルートである。

より形成された。300 万年前のプレート運動で傾斜し、上方へ圧縮して片麻岩や花崗岩からなる山体が出来たと考えられている¹⁾。

ルウェンゾリ山地のほとんどは、「ルウェンゾリ山地国立公園(Rwenzori Mountains National Park)」「ウガンダ共和国)」、「ヴィルンガ国立公園 (Virunga National Park)」(コンゴ民主共和国)として世界遺産に登録されている。ルウェンゾリ山地は、深い峡谷に区切られた7つの山塊(スタンレー山塊、スピーク山塊、ベーカー山塊、エミン山塊、ゲシ山塊、ルイジ・ディ・サボイア山塊、ポータル山塊)から構成され(図1、図2、注1))、20以上のピークがある。その最高峰マルゲリータ峰(5109 m)は、スタンレー山塊にあり、アレクサンドラ峰(5091 m)、アルバート峰(5087 m)の5000 m峰と氷河を隔てて並びたっている。7つの山塊はそれぞれMt. Stanleyのように書かれるが、スタンレー山塊は他の山塊と同様に一つの山でなく、その中にマ

ルゲリータ峰以下、アレクサンドラ峰、アルバート峰、モエビウス峰、エレナ峰、サボイア峰の6つのピークがある。(図3、写真1、写真6、注2))

ルウェンゾリの氷河の後退に関しては、「ルウェンゾリ山頂の氷河も20世紀以降の変動の影響を受けている。1906年には、山頂では43もの名付けられた氷河が分布し、氷河が覆う総面積は7.5 km²(当時のアフリカ氷河の約半分)であった。ところが、2005年の観測では、わずか3つの山に約1.5 km²が残るに過ぎなくなっていた。」との記述がある¹⁾。

2. ルウェンゾリの歴史

紀元150年、ギリシャの地理学者トレミー(プトレマイオス)が「常に雪をかぶった高い山から流れる水を集めた大きな湖、あふれ出る水はナイルになる」と記し²⁾、この山を「月の山」と称し、ナイル川の水源として地図上にその位置を書き記

している³⁾。

下界からルウェンゾリの頂上の氷雪が見えることは滅多にない。これは、湖面の面積が琵琶湖の百倍に及ぶビクトリア湖から発生する多量の水蒸気のため年間を通して雨が多いからであり、そのために発見が遅れ、「幻の月の山」と呼ばれている所以である。

1888年、探検家でジャーナリストのヘンリー・スタンレーが、アルバート湖の西南岸にいて、偶然一人のボーイから「塩でおおわれた高い山が見える」と教えられ、この山の発見につながった³⁾。ルウェンゾリの意味は「そこから雨の来るところ」、あるいはバコンジョ語の崩れで「雪の丘」とも言われる³⁾。命名者はスタンレーである。

初登頂はイタリアのアブルッツィ公爵隊で1906年のことである。ルウェンゾリの山名はアブルッツィ公爵隊が全て命名した。この隊はマルゲリータ峰の初登頂のみならず、全部で15のピークに初登頂している。マルゲリータは当時のイタリア国皇后の名前、アレクサンドラは当時のイギリス国皇后の名前である。ウガンダは当時イギリス保護領であった³⁾。

日本人で最初にこの山に登ろうとしたのは今西錦司博士である。1958年3月、ゴリラの生態研究の予備調査の途中に立ち寄ったものであったが、日数や諸準備の不足、装備不十分などで登れなかった³⁾。日本人の初登頂は東大全アフリカ踏査隊で1962年8月であった⁴⁾。

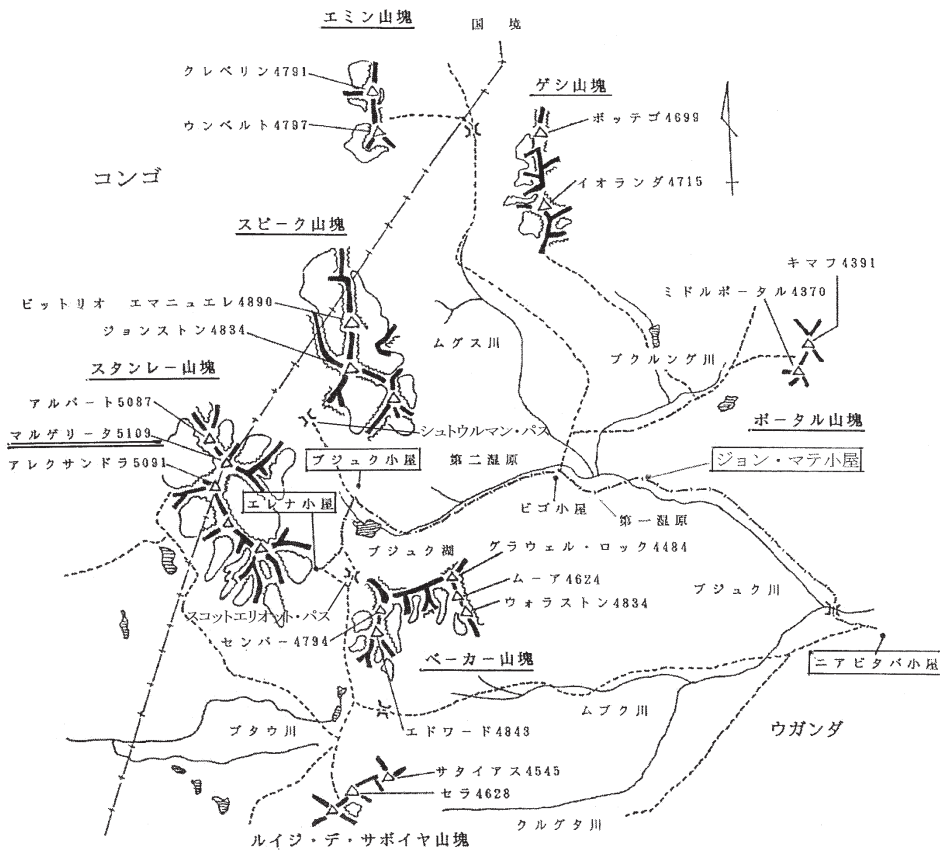


図2 ルウェンゾリ概念図。7つの山塊名に下線を引き、小屋名を四角で囲った。(株)アトラストレック資料図に加筆。

3. 登山の概要

2012年2月、女性2人と私の3名でルウェンゾリ登山に出かけた。全員60才台になる熟年登山隊であるが、2人共に日本で数少ない女性のエベレスト登頂者（公募隊に参加）である。手配は（株）アドベンチャー・ガイズ社に依頼し、現地手配はルウェンゾリ・マウンテナリング・サービス社（以下「RMS」という。）である。日程は通常の登山期間に、ジンジャへのナイル川源流観光1日を加えて16日間とした。現地ガイド、ポーター、全食事込みの依頼であった。

メンバー：栗本俊和、島田智恵子、滝口清美（3名）

2月12日：成田発22時、ドバイ乗換。

2月13日：ウガンダ、エンテバ空港15時着。

車で首都カンパラのスピークホテルへ向う。ホテルのロビーに大きな絵画が飾られていた。ビクトリア湖、ナイル川とイギリス人探検家のジョン・ハニング・スピークを描いた絵で、そこで初めてホテルの名前の意味に気付いた。スピークは1862年にビクトリア湖の水がナイル川に通じることを発見し、スピーク山塊にその名を残している。

2月14日：車でフォートポータル経由カセセ（Kasese）へ向う。イバンダ村（Ibanda）のRMSのサファリーロッジに17時前到着、宿泊した（図1を参照）。

2月15日：登山開始。

登山期間は7泊8日、ニャビタバ小屋（標高2650m）、ジョンマテ小屋（標高3380m）、ブジュク小屋（標高3980m）、エレナ小屋（標高4540m）と一泊しつつ前進し、5日目が頂上アタック、下山に3日を見ているが、1日短縮が可能で実質的な予備日となっている。ロッジ前からは、7つの山塊の中で一番近いポータル山塊が望める（図2を参照）。朝食後、RMS事務所でオリエンテーション、ガイドの紹介、荷物の計量などが行われた。ガイドはチーフ、サブ、見習ガイドの3名、コック2名、ポーターが13名の合計18名。RMS事務所から車でガタガタ道を進み、国立公園事務所で入山手続きをする。10時20分登山開始、今日より3名共長靴での出発。ブジュク川に沿って山肌を縫う道を歩き、中間地点の休憩ベンチで行動食のランチを食べる。14時20分、ニャビタバ小屋着（2650m）。小屋には登頂し下山してきた南

アフリカ人や1人旅のベルギー人女性（トレッキング目的）などかなりの宿泊客がいた。新しい小屋に建て替り収容力も増えている。

2月16日：晴れ、8時15分出発。

すぐにムブク川周回コースとの分岐点で、ここからブジュク川へ下り、吊り橋を渡る。竹林を抜け、岩場からはスタンレー山塊のマルゲリータ峰、アレクサンドラ峰と氷河がはじめて望めた（写真2）。雨なしで乾いているため、bog（湿地帯）もほとんどなく14時、ジョンマテ小屋に到着した（3380m）。小屋に着くと、今日は野菜炒めにチャパティの軽食が出され、行き届いたサービスである。

2月17日：

8時頃雨が降り出す。すぐに止んだが雲の中の変わりやすい天気になってきた。9時出発、ブジュク川を渡って第一湿原を歩く。ここは木道が一直線に続く道に改良されたため、泥だらけの湿原のイメージはない。ビゴ小屋を通過して、第二湿原に入る（写真3）。湿原の中心地にあたるが、ありがたいことに雨が少なかったのかそれほど濡るところもなく通過できる。もちろんガイドのトレースに従ってのことであり、踏み外せば濡る。ジャイアントロベリアやセネシオの林立する少し異様な雰囲気の中、せせらぎに変わったブジュク川を渡渉すると、絶好の休憩場所に着く。この中間地点から1時間ほどでブジュク湖が現われる。湖のまわりの第三湿原は第二湿原よりも濡るところが多かった。13時40分、ブジュク湖の先の小高いところにあるブジュク小屋に着いた（3980m）。休憩後、1人でガイドを連れて、スピーク山塊への登路であるシュトウルマン・パスの方に登ってみるが雨が降りだし、高度計で100mほど登って引き返した。夜半、雨、風、雷が強まる。

2月18日：

前夜は低気圧の通過のためか雨が断続的に強く降った。今日がアタック日なら登頂は無理と思われる天気である。同じ日に入山した単独行のイスラエル人の若者はどうしたかな？と思う。彼は一日早くブジュク小屋に入り、昨日はブジュク小屋から直接マルゲリータ峰に登る新しいルートに入っていると聞いている。ジョンマテ小屋とブジュク小屋では、あきらかに周囲の雰囲気が変わった。セネシオの林立と寒さのためであろう、



写真2 (2012/2/16) スタンレー山塊、マルゲリータ峰がはじめて望める。



写真3 (2/17) 第2湿原（アッパービゴボグ）を通過する。



写真4 (2/18) エレナ小屋からサボイア氷河の末端を望む。



写真5 (2/20) スタンレー山塊、マルゲリータ峰(5109m) 登頂。



写真6 (2/20) スタンレー氷河上に、右から、モエビウス、エレナ、サボイアを望む。



写真7 (2/24) ジンジャー ナイル川の0m起点、The Source of R.NILE Jinja World's Longest Riverの看板がある。

4000 m の高所に来た違いとも言える。ブジク小屋出発では、雨具を着用、1 時間強の登りで峠の展望台に着く。ブジク湖他が良く見えるが、上は雲で被われていて、スコットエリオット・パスの方もよく見えない。峠から少し行ったところから岩場が変わる。苔の着いた滑りやすい岩場を考え、今日は長靴から登山靴に変えた。3 時間半でエレナ小屋（4540 m）に着いた。寒々しい感じの場所である。トイレ小屋は少し離れている。ときおりガスが晴れると、エレナ氷河、サボイア氷河の末端が顔を出す（写真 4）。19～20 時頃から雪が降り出す。夜半も降り続き、トイレのため外に出るたびに僅かながら雪積が増えている。

2 月 19 日：

4 時、予定の時刻にガイドが今日のアタックについて指示を仰ぎにくる。「今日のアタックは中止、明日に延期」を伝える。積雪は 10 cm ほどある。18 日エレナ小屋に着いた時、小屋にはイスラエルの若者が 1 人いた。聞くと、17 日はブジク小屋から直上ルートで頂上をねらったが無理で、エレナ小屋に転進した。18 日は再度頂上をねらったが天気が悪く引き返したと言う。そして今日が最終アタック日とのことだったが、残念ながら今日も天気が悪く、下山を決定して 8 時前にガイドと下山して行った。結局彼にとっては、3 日間悪天が続いたことになる。天気は一時晴れ間

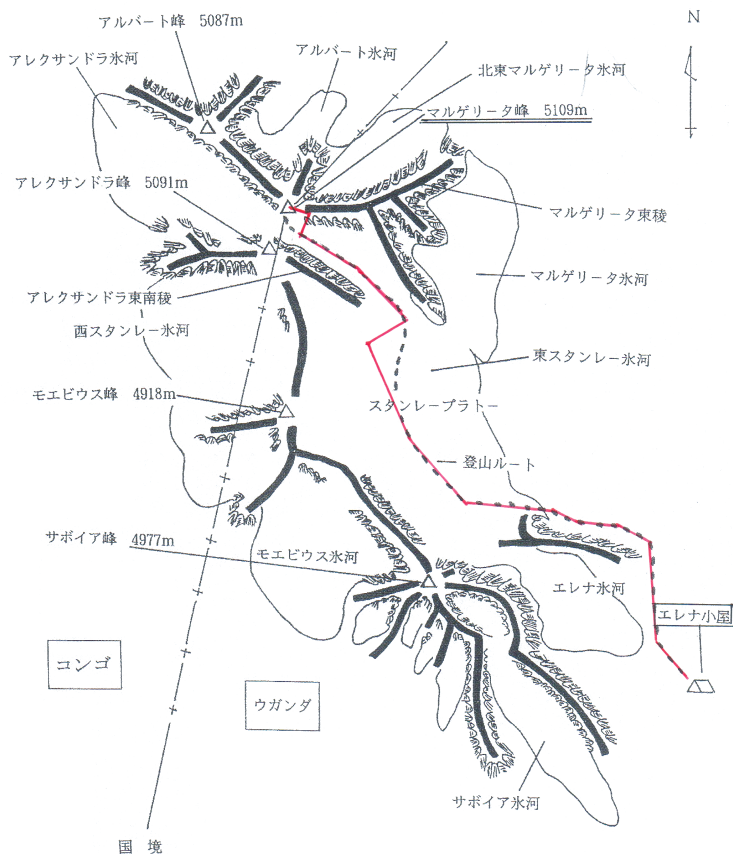


図 3 スタンレー山塊登頂ルート図。登頂ルートを赤線で記入。(株) アトラストレック資料図に加筆。

も出て上部が見えることもあった。しかし全体的にはガスで覆われていた。

2月20日：

4時、小屋内の気温は -5°C 、出発は6時15分。天気は曇りでガスっている。2名のドイツ人女性隊（+ガイド2名）が先に登っていく。ヘッドライトを点けてその後を追う形で出発する。ドイツ隊を追い越しエレナ氷河を右に巻いた岩稜のCOLで小休止、ライトを外す（図3を参照）。岩稜帯の登りが続きスタンレー氷河に達する。スタンレープラトーを1時間ほど歩いた9時頃、氷河への下降点に到達しアンザイレンする。その間にドイツ隊が先行し、マルゲリータ氷河への下降でロープをフィックスすべく工作に当る。日本隊のガイドも協力しているようであるが、なかなか前に進まない。待たされ、風も吹き寒さを感じるが、先行部の様子がよくわからない。どれくらいの時間がかかったのか、やっとのことでマルゲリータ氷河に降り立つ。その降り立つ部分が、岩と雪面が1mほど空いており飛び降りる形になる（フィックスロープが張ってある）。マルゲリータ氷河で日本隊がやっと先行することができた。ところどころにクレバスがあるが、それほど大きいものではないので慎重に渡る。12時頃でもまだガスの中で頂上は見えなかった。12時20分頃、突然頂上が見えだす。頂上が近いと元気が出る。最後までマルゲリータ氷河を詰めて右ヘトラバースに入る。昨年の日本隊が引き返したというトラバース箇所は、今回はそれほど問題なく通過できた。後は固定ザイルが残置されている箇所を登り、岩稜を詰めれば頂上である。13時35分。頂上標識の前に座り込んで記念写真を撮る（写真5）。

13時55分ドイツ女性隊の登頂と同時に頂上を後にした。アレクサンドラ峰だけでなく、スタンレー氷河、マルゲリータ氷河がよく見える。それにしてもスタンレー氷河からマルゲリータ氷河への下降は難しい場所である。岩が露出しているためであるが、昔は氷河で覆われていたそうである。氷河の消えた現在はマルゲリータ氷河からブジュク小屋へ直接降りるルートが開発されたのは頷ける。マルゲリータ氷河からは、モエビウス、エレナ、ザボイアの各峰が望めた（写真6）。スタンレー氷河への登り返しは、フィックスロープにユマールをかけて登った。スタンレー氷河からは3人そ

れぞれにガイド付きで、再び見ることもなからう「幻の月の山」を、後ろを振り返り写真を撮りつつ各人のペースで下山した。エレナ小屋到着は17時30～55分であった。

2月21日：下山へ。

ブジュク小屋はバスしてジョンマテ小屋まで下る。第一湿原で雨に降られジョンマテ小屋に到着した。

2月22日：

ニャビタバ小屋を経てニャカレンギジャへ下山し、14時前、公園事務所で無事下山のサインをして、今日の泊りのRMSサファリーロッジに着いた。衣類、荷物の整理と、久しぶりのシャワーで体を洗った。

2月23日：カンバラまで移動。

フォートポータルでの昼食は、その名も「Mountain of the Moon Hotel」という名のホテルで広い庭をながめながらゆっくりと時間をかけて摂った。夜暗くなってから、カンバラのスピークホテルに到着した。

2月24日：ジンジャ／ビクトリア湖とナイル源流の旅

ジンジャは、イギリスの探検家ジョン・ハニング・スピークが、ヨーロッパ人として初めてビクトリア湖が白ナイルの源流であることを発見した場所である。首都カンバラから80kmほどの所にあり、現在ではウガンダ有数の工業都市として発展している。10時すぎにジンジャに着き、ボート乗り場に向う。ボートは貸切で、ナイル川が流れ出す場所にある島に向う。この島のビクトリア湖寄りに「The Source of R. NILE Jinja World's Longest River」の看板があり、その左岸寄りに、「ナイル川0m起点」のモニュメント（写真7）がある。川床の傾斜が始まり波立って水が流れだし、かつ水が湧き出している場所も確認できた。ガンジーの遺灰も、世界で一番長い川に流すということで、ここからナイル川に流された。ナイル川は総延長6650kmである。

2月25日：カンバラの市内観光。

ウガンダ博物館、マケレレ大学、カスピ・トームの3ヶ所を見学・視察した。

26日：エンテベ発、27日：成田着。

4. 日本人最初のルエンゾリ登山について

2項「ルエンゾリの歴史」で少し触れたが、50数年前の今西錦司博士の日本人最初のルエンゾリ登山をここに要約し³⁾、今回の登山と比較してみる。「」はそのままの引用である。

1958年3月15日からの8日間が登山期間であった。これは今回と同じ日数であるが、地元の地方弁務官からは「せっかくルエンゾリへきて、なぜもっと日数をかけないのか、」と言われていた。「われわれとしては、八日間をルエンゾリにさくのが、精一杯なのに。」というのが今西博士の弁明です。ゴリラ研究の調査途中に立ち寄ったもので時間が取れなかったようである。

15日からの3日間でブジュク小屋まで入っている。これも今回と同じである。

18日、「ブジュクの小屋からなら、スピークに登るのがいちばんやさしいとは、オスマストン、ロザリー、パスルールの一致した意見だった。それでまず手はじめに、スピークにあたることにする。」と書いてある。シュトウルマン・パスからスピーク氷河に入って、「白いガスに氷河の上はすっかり閉ざされていた。」「しかしまた、ガスがかかってきたので、今日は偵察ということにして、12:30 帰途につく。」で小屋に戻った。

19日、スピーク登頂を狙い出発する。スピーク氷河に入り、「雪なら少々急でもゆけないことはない。しかし、それがもし氷のむき出しになった斜面だったら、たとえ急斜面でなくたって、困ったことになってしまう。われわれはクランポンを持っていないからだ。ピッケルだけは持っていたが、…」とあり、更に、「試みにピッケルを打ちこんでみると、手ごたえはまさに氷である。」で氷河をあきらめ、尾根に転進するが、「あとにつづいてきた伊谷は、割れ目の途中で立ち往生している。これはいけない。」となり、登頂を断念した。

20日、「エレナの小屋まで前進して、スタンレー・プラトーに登り、アレクサンドラをねらう。そこまでゆけばアレクサンドラが駄目でも、メービウス(本稿ではモエビウス)になら登れるであろう。」と決めて、ブジュク小屋からエレナ小屋まで前進して、宿泊した。

21日朝、「ひどいガスである。6時、7時、8時と待っていたけれどもガスはますます濃くなるば

かり、もう出かけないことには、時間切れになるおそれがあるので、9時、ガスの中出発。」、エレナ氷河に取り付くが、「氷河にとりついてみると、やっぱり堅い。ビムラムではステップを切れずには歩けない」状況になり、「かくして、すこしはステップも切ってみたけれど、もはやこれ以上の前進は望ましくないとみて、われわれは小屋に引きあげた。いわば戦わずして降伏したようなものである」と書いている。ブジュク小屋まで戻り、宿泊した。

22日、ニャビタバ小屋へ下山した。

以上が要約であるが、登れなかった理由として、「われわれに氷に対する装備ができていなかったことと、天気のおもしろくなかったことが、重なったためである。」と書かれている。そして、アイゼン等を持参しなかったことについては、「ルエンゾリにいまなお残った、4400～4500 m級の処女峰に登頂するつもりだったから」とも書いているが、スピークに求める処女峰があったかは不明である³⁾。

5. 感想

ルエンゾリは位置的にヨーロッパからの登山者が多く、日本からはまだ登る人は少ない。今後増えていくと思うが、氷河が融けて山自体はむづかしくなっている。アレクサンドラ東南稜(写真1)の下降は、その最たるものである。昔は雪氷で覆われていたが、現在では岩稜の難しい下降を強いられる。よって少人数の力のある隊が相応しい。

そして、登頂には天気が一番重要な要素と考えられるので、山行の時期の検討も大切である(本文では触れなかったが、今西博士は3月が良くなかったと書かれている)。

ルエンゾリはキリマンジャロとは違い独立峰でなく、熱帯雨林・高山植物更には雪原、氷河、岩と、豊かな多様性のある自然と多彩な植生を持つ山地が魅力的である。また、常に雲に覆われていることから非常に湿潤、雨の多いところであり、湿地帯を抜けた上にある、雪と岩の織り成す頂上山塊に、魅力を感じる山である。

注

- 1) 図1、図2ともに地図上は7山塊あるが、ポータル山塊を除いた6山塊としている文献もある。
- 2) エレナ峰は、図3に記載はないが、文献3)、写真6にある。

引用・参考文献等

- 1) フリー百科事典「ウィキペディア(Wikipedia)」の「ルウェンゾリ山地」
- 2) 地球の歩き方編集室「地球の歩き方 東アフリカ 08～09年版」ダイヤモンド社, 2009, p.100
- 3) 今西錦司著「今西錦司全集第7巻 ルエンゾリ - 月の山」講談社, 1975, pp.360-361, pp.363-364, pp.367-377, pp.390-432
- 4) 深田久弥著「世界百名山」新潮社, 1974年, p.45
- 5) 写真1～7: 栗本俊和 HP「世界の山, 日本の山」の「ルウェンゾリ登頂とナイル源流の旅」, <http://members.jcom.home.ne.jp/tkurimoto/>

Summary

Climbing of Mt. Stanley (Margherita Peak), the Rwenzori Mountains February 2012

Toshikazu Kurimoto

The Academic Alpine Club of Kyoto (AACK)

The Rwenzori Mountains are located on the boundary of Republic of Uganda and Democratic Republic of the Congo and the third highest mountain of Africa with glaciers at a height of 5109m. This area has a large amount of rain due to so much steam supplied from Lake Victoria, and the mountains can be rarely seen from the surrounding area and villages. So it has been called “Illusional Mountain of the Moon” for a long time. It is also known as the source of River Nile.

This paper aims to introduce a mountain range that contains various interests and wide diversity in the middle of Africa, by reporting climbing activities at Mt. Stanely of the Rwenzori Mountains in February 2012. The Rwenzori Mountains comprise more than 20 peaks, and the highest peak of Mt. Stanley is called “Margherita”.

Approaching the high camp involves walking through the deep, humid jungle and reaching the summit requires technical walkings on the glacier and the rocky ridges. This means the Rwenzori Mountains have many attractive factors for both the adventure and climbing.